

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長 寺田 典生
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長 横山 彰仁

就任のご挨拶



産科婦人科学講座
教授 前田 長正

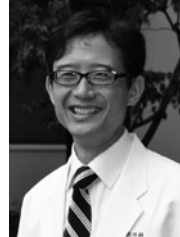
平成26年7月1日付けで、産科婦人科学講座教授を拝命し就任いたしました。何卒宜しく願い申し上げます。

私は高知出身で、昭和54年高知医科大学に2期生として入学しました。まだ病棟と外来棟、図書館もない時代でしたが、荒れ地が少しずつ大学に変化して行く様に喜びを感じていました。卒業後は直ちに産科婦人科学講座に入局いたしました。学生時代より免疫学に興味を持っていたことから、大学院は免疫学を専攻させていただき、主に腫瘍免疫の研究を行いました。

私が産科婦人科学教室に入局したときは、相良祐輔先生(現地域医療支援センター長)が教授に就任された年であり、相良門下一期生として熱いご指導を受け、医師としての教育を一からご教授いただきました。またその後、深谷孝夫先生(現名誉教授)には、臨床・研究のみならず准教授・病棟医長としての教室の纏め方などについてもご指導いただきました。厚く御礼を申し上げます。

わが国の産科婦人科は、少産少子、高齢化、晩婚化などの社会的要因により、周産期・腫瘍・生殖内分泌領域それぞれが重要な課題を抱えています。特に周産期は若手医師の減少から逼迫した状況にあり、日本の将来が危惧される要因となっています。しかしながら当教室におきましては、活力のある若手医師が多数入局してくれております。今後さらに若手医師を拡充し、彼らと中堅医師や教室スタッフが有機的に連動し、教室がさらに活性化するように運営していく所存です。

教室の臨床・研究としましては、これまで子宮内膜症研究と臨床を中心に行って参りましたが、今後はさらに臍帯血を用いた幹細胞研究にも力を注ぎ、それを両輪として教室を活性化したいと考えています。そして高知大学の発展にも貢献し、ひいては高知県の医療向上に寄与できるように、微力ではございますが誠心誠意尽力する所存です。今後とも何卒宜しく願い申し上げます。



整形外科学講座
教授 池内 昌彦

平成26年7月1日に整形外科学講座教授を拝命いたしました池内昌彦です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は兵庫県明石市出身で、高知医科大学入学を機に土佐の地に参りました。平成7年に大学を卒業し、卒後すぐ山本博司初代教授が主宰されていた整形外科教室に入局させていただきました。整形外科を選択した理由は、自分が振るうメスで歩けなくなった人を再び歩けるようにできる、というわかりやすい点に惹かれたからです。卒業前には地元に戻ることも考えましたが、若い医局員が元気で活気に満ちあふれており、そこに魅力を感じ母校に残ることを決めました。

大学院時代には生体材料の研究をさせていただきました。当時研究した生体活性型セメントが、現在では骨粗鬆症性脊椎圧迫骨折の治療に広く臨床応用され、教室の看板手術になっていることに大きな喜びを感じます。大学院修了後は、関連病院で4年間臨床経験を積み、関節・スポーツ整形を専門にすることを決めました。

平成15年には第2代谷俊一教授が引き継がれた教室の一員に迎えていただきました。平成19年には米国アイオワ大学へ研究留学をさせていただき、関節専門医としてのライフワーク基盤づくりを進めました。帰国後は臨床、研究、教育それぞれをバランスよく行うよう努めて参りました。気が付けば帰局後11年が経過し、多くの先輩方のご指導をうけ成長させていただき、また、優秀な後輩に恵まれて臨床、研究ともに充実したものとなりました。この場をお借りしてお世話になった方々に心より御礼申し上げます。

高齢化率が全国有数の高知県では、日本一の健康長寿県づくりを目指しています。その実現のためには整形外科医が中心的役割を担うと考えています。高知県の地域医療に貢献するとともに、優れた整形外科医の育成および整形外科学の発展に寄与する研究を進めることに全力を尽くす所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2014年度
上半期

防災特集

今年度の上半期に高知大学医学部附属病院にて開催された、防災に関する講習や訓練についてご紹介します。この他にも、高知大学医学部附属病院では防災に関する様々な講習等を行っています。

第3回 院内災害対応訓練 講習会 (Disaster ABCコース)の開催

高知大学医学部災害・救急医療学講座 特任教授 長野 修



第3回院内災害対応訓練講習会(Disaster ABCコース)が5月10日(土)医学部一般講義棟で開催されました(主催:医学部災害・救急医療学講座)。

本コースは、NPO法人医療危機管理支援機構(富士市)が2010年に開発した災害医療のトレーニング

コースで、多数傷病者の受け入れを想定した内容になっており、病院単位で行うのに向いています。災害医療の予備知識が少ない方も参加でき、訓練を通して災害医療の基礎知識が自然に身に付きますので、一度受講されることをお勧めします。高知大学医学部では

2012年7月、2013年6月に続いて3回目の開催で、恒例となった感があります。

今回の受講者は、医師3名(学外者1名)、初期研修医11名(学外者1名)、看護師30名(全員学内)の計44名で、初期研修医が多数受講してくれたことが特徴と言えます。28名のボランティア(看護学科教員1名、看護師1名、医学科学生6名、看護学科学生20名)が模擬患者を担当し、講師陣は外部講師4名と本学のDMAT隊員9名が務めました。さらに、75名の見学者(県内16の医療施設等



トリアージの様子



治療の様子①



治療の様子②



全体訓練トリアージ

から70名)が参加し、運営スタッフ8名と合わせて全参加者は163名でした。また、並行して災害用の医療機器等の展示も行われました。

今回のコースでは、「災害医療に関する座学」に続いて「災害対策本部のスキルブース」を全体で行いました。この点は従来と異なっています。その後、3つのグループに分かれて、①情報・通信、②トリアージ、③治療および入院・搬送、のスキルブースを順次体験し、最後に全体を通しての実動訓練を3回繰り返して行いました。例年よりスキルブースが減った分、1回毎の実動訓練に時間を割くことができ、受講者の満足度が高くなった印象がありました。丸1日の訓練で疲れたかもしれませんが、災害対策本部や情報・通信などを初めて経験した方も多く、受講者に好評でした。

昨年度から国立大学附属病院間の災害対策相互訪問事業が始まり、今年は広島大学の訪問を受けることになっています。その意味でも、災害訓練の重要性の認識度は上がってきていると言えます。医学部ならびに附属病院主催の災害訓練は毎年秋に行われていますので、本コース開催と併せて災害医療訓練が年2回行われる形になっています。南海トラフ地震に備えて災害医療教育・訓練の重要性が増している今、学内だけでなく学外にも広く開く形で行われた本コースの開催は、大学病院の役割という意味においても大きな意義があります。今後も継続して開催していきたいと思えます。



座学の様子

県の総合防災訓練にて広域医療搬送訓練を実施

会計課



陸上自衛隊ヘリUH-47で搬送される模擬患者



高知大学医学部に設置されたSCU (航空搬送拠点臨時医療施設)

6月1日(日)、岡豊キャンパスにおいて、高知県総合防災訓練の一環である広域医療搬送拠点の設置運営訓練が行われました。この総合防災訓練は、大規模地震、豪雨等実際の災害を想定し、県、市町村及び各防災関係機関による実践的な応急対策とそれぞれの連携した訓練を実施することにより、総合的な防災体制の確立を図ることを目的として、高知県防災会議等の主催で行われたものです。

サテライト会場の一つとなった岡豊キャンパスでは、高知大学DMAT1チームを含む3つのDMATが県内外から集まり、SCU(※)の設置と運営、また自衛隊ヘリによる患者搬送等の訓練が行われました。

訓練終了後の反省会では、DMAT同士の情報伝達面での課題、訓練設定における課題等、参加者から様々な意見が上がり、複数機関が参加した訓練ならではの成果を得ることができました。

※Staging Care Unit(航空搬送拠点臨時医療施設)

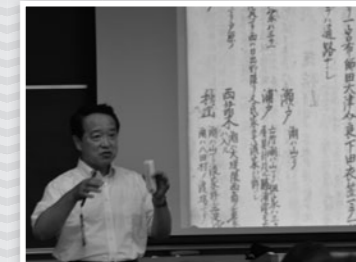
事務職員対象の防災セミナーを開催しました

総務企画課

7月16日(水)、岡豊キャンパスにおいて、事務職員を対象とした防災セミナーを開催しました。このセミナーは、東日本大震災で学校の職員や銀行員などが使命感から逃げ遅れ、大勢の人が犠牲になったとされていることを受け、南海トラフ地震に対する大学職員の心構えなど、普段から防災対策を意識していくことを目的に実施されたものです。今回のセミナーには約90名が参加し、講師である岡村眞総合研究センター特任教授の話に熱心に聴講しました。

岡村特任教授からは、岡豊キャンパス周辺の地盤の図や、最大クラスの津波が来た場合の津波高分布の推計などが提示され、南海トラフ地震の際には岡豊キャンパスがどのような状況に置かれると予想されるのかについて、詳しい解説がありました。また、セミナーの後半には、津波によりわずか数分で消滅した町の映像や、日頃の津波に対する備えや知識の有無が生死を分けた人の映像などが紹介され、日常生活における心構えがいかに重要であるかを教わりました。

この防災セミナーは、岡豊キャンパス以外にも朝倉・物部・小津などのキャンパスで実施されました。



講義を行う岡村眞総合研究センター特任教授



熱心に講義を聞く参加者

新採用職員紹介

就任の挨拶

高知大学医学部附属病院の関係者皆様には、平素より大変お世話になっております。4月1日付で榎前技士長の後任としてリハビリテーション部技士長に就任させて頂くことになりました理学療法士の細田里南と申します。高知県出身で、県外の病院で4年間の臨床経験を経て12年前に当院へ入職しました。現場では主に小児領域の理学療法を専門としております。現在、子育て中のためワークライフバランスを実現することが課題です。

現在リハビリテーション部スタッフは医師3名、看護師1名、理学療法士11名、作業療法士5名、言語聴覚士5名、事務補佐員2名であり、ここ10年で約3倍のスタッフ数となりました。そしてその活動範囲は運動器障害、神経障害、呼吸・循環器・代謝障害、

リハビリテーション部 技士長 細田 里南



発達障害や精神障害、高次機能障害、嚥下障害、音声障害など多岐にわたり、たくさんの診療科や病棟に関わらせていただいております。また、患者さんのライフステージに応じ急性期から在宅復帰を視野に入れたリハビリテーションを展開できるよう心掛けています。院内の様々なチーム活動にも参加しており、最近ではがんのリハビリテーションにも力を入れております。若いスタッフが多いですが、個々のスキルアップがより専門性のあるリハビリテーションならびにチームアプローチにつながるよう、研究・教育活動に日々精進していく所存ですので、今後ともリハビリテーション部に変わらぬご指導・ご支援くださいますようお願い申し上げます。

新人紹介

病院事務部・医事課職員 岡田 崇志



平成26年4月より病院事務部・医事課職員として採用となりました岡田崇志と申します。

昨年、本院の医事課業務が外部委託から直営化へと体制が変わる事を知り、これまで自身が民間病院で7年間、医事課職員として培ってきた経験を活かしつつ、業務に必要な専門知識をこれまで以上に幅広く身につけられると考え、本院を志望いたしました。

現在は、診療請求係として外来の保険請求業務や窓口受付業務等を担当しております。業務では、新たな保険請求に関する知識や医事システム操作等の習得に、入職当初は少々戸惑いもありましたが、諸先輩方にいろいろと教わりながら少しずつ、自身のスキルアップに繋げているところです。

今後は、患者さんや職員の方々から信頼されるような医事課職員を目指し、医事業務に精通することは勿論のこと、専門性を更にも高め、本院に貢献できるよう精一杯努力して参りますので、よろしくごお願い致します。

放射線部 矢部 史佳

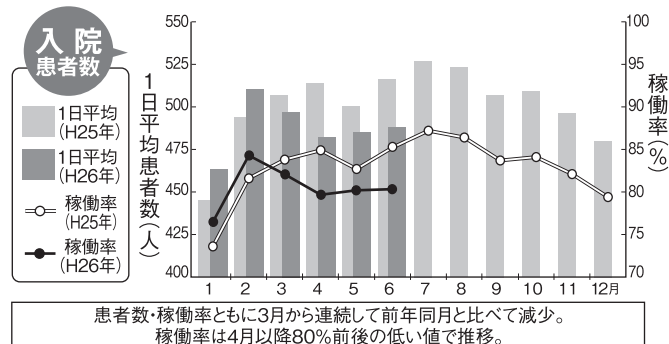
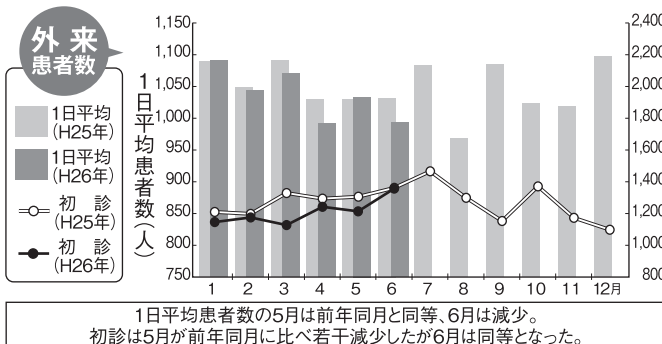


今年度4月から診療放射線技師として新採用となりました矢部史佳と申します。神奈川県での大学生生活4年間を終えて、地元である高知県に戻ってきました。趣味は色々ありますが、体を動かすのが好きなので、先輩と一緒にバレーボールをしたりしています。おとなしそうと言われることが多いですが、皆でご飯を食べたりにぎやかに楽しくお酒を飲んだりするのも大好きです。

現在主に一般撮影で働いていますが、実際の臨床現場では教科書で学んだ知識だけでは対応できず、撮影方法や撮影条件、撮影時の工夫など先輩方から学ぶことばかりです。学生の時とは違い、毎日が実践・本番なので身を引き締めて仕事に取り組んでいます。

まだまだご迷惑をおかけしてばかりですが、一日も早く放射線部の戦力になれるよう頑張ります。また、諸先輩方から「高知大学に来てくれて良かった!」と思って頂けるような技師になりたいです。これからどうぞよろしくお願い致します。

診療状況



編集後記

本年度より編集委員副委員長を務めさせていただくこととなりました。読みごたえのある病院ニュースをめざして頑張りますので、よろしくごお願いいたします。今回の病院ニュースでは、新たにご着任されたお二人の診療科長の先生にごあいさつを投稿していただきました。新規の診療体制や治療法などをご紹介されており、各診療科の活性化、ひいては病院全体の活性化が期待されます。上半期の防災特集をお読みいた

だくことにより、今後発生することが予測されている南海トラフ巨大地震へ備えることの重要性を再確認していただければと思います。また、リハビリテーション部の細田里南技士長から就任のご挨拶を頂き、新人紹介では二名の新採用職員からのコメントを掲載させていただきました。

暑さ対策のみならず、自然災害対策にも気を配り、暑い夏を乗り切りましょう。

(文責：福島 敦樹)